

リスクコミュニケーションの「落とし穴」と、その対応策

食品安全委員会委員 野村一正

リスク分析手法における重要課題は、リスクコミュニケーションの拡充

食品安全の分野でリスク分析の手法が本格的に導入されて、7年になります。多くの科学者の熱意と努力により膨大なリスク評価がなされ、それを基本とした食品の安全管理が行われるようになりました。リスク評価過程は基本的には公開され、透明性と公正性は概ね確保されていると自負していますが、ただ依然としてこれらへの理解は不十分で、このため現実にはいくつかの課題も抱えています。これらの課題を解決し、リスク分析による食品安全確保をさらに推進するための対応策の一つとして、今後はリスクコミュニケーション(以下「リスコミ」)の拡充がますます重要であると認識しています。

リスコミの活用は各国共通の課題

リスコミはリスク分析の要素の中では難しい分野であり、十分に活用されていないという悩みは各国共通のものでもあるようです。特に国連食糧農業機関(FAO)が出版した食品リスク分析のガイドブック(注)での「避けるべき落とし穴=リスクコミュニケーションが

不向きなもの」の項目をみると、リスコミの実行にはより深い考察が不可欠であることを痛感します。

知識を伝えるだけのリスコミに、十分な効果はない

ここで指摘する「落とし穴」の一つは、リスコミを一般への教育と考えてしまうことです。リスコミでは時として、専門家が持っている知識をほとんど知識のない一般の人に伝えると考えるしまうが、実際には一般の人も視点は異なるものの、すでに多くの情報を持っているかもしれない。その点を考えないリスコミは効果がない。効果的なリスコミは情報の双方の交換にあり、情報を集めることは伝えることと同様に重要である、という指摘です。

懸念への効果的な対応は、しっかりとした対話にある

もうひとつは「ある食品が安全であると人々に知らせることは、必ずしも人々を安心させるとは限らない」というものです。例えば消費者が過度に怖がっているリスクについて、その懸念があまりにも軽く片づけられたと感じた場合、当局への信頼が低下して、かえって懸

念を増す恐れが強いという指摘です。ガイドブックでは、「一般に信じられている恐れへの最も効果的な対応は消費者との対話を行い、彼らの懸念に関する話を聞き、それに対応すること」が必要としています。

参加者それぞれ、お互いの視点を尊重する想いが大切

これら二つの例で考えられるのは、リスコミに際しては参加者いずれもがそれぞれの視点を持っていることと、それらを尊重することへ想いを致すことの重要性であると思います。大変難しいことではありますが、リスコミが十分に機能できるようにするにはこうしたことへの対応が何より重要といえるようです。

(注)「食品安全リスク分析(FAO食品・栄養シリーズ第87号)」(林裕造:監修/豊福肇・畝山智香子:訳)



食の安全への不安・疑問から情報提供まで、皆様のご質問・ご意見をお寄せください。

食の安全ダイヤル **03-6234-1177** ●受付時間: 10:00~17:00/月曜~金曜(ただし祝日・年末年始はお休みです)

Eメール受付: <https://form.cao.go.jp/shokuhin/opinion-0001.html>

食品安全委員会 e-マガジン登録 <http://www.fsc.go.jp/sonota/e-mailmagazine.html>

●「食の安全ダイヤル」「e-マガジン登録」は、食品安全委員会のホームページからもアクセスできます。

食品安全委員会ホームページ: <http://www.fsc.go.jp/>



内閣府 食品安全委員会事務局

〒107-6122 東京都港区赤坂5-2-20 赤坂パークビル22階 TEL:03-6234-1166